

## 差別の現実から深く学ぶ

## 私を変えた出会い

「私は差別をしていました…」鳥取市内のある学校で、子どもたちにこう語りかけるAさん。ゲストティーチャーとして学校に招かれたり、保護者研修会で講演をしたりしています。活動を始めた経緯についてお話をうかがいました。

小学校時代は、ほとんど同和教育を受けていません。一度映画を観たくらいです。「部落差別って昔のことだと思っていたけど、今でもあるのかな？」と思いきや、「そうということには関わらないでいい。黙っとればいい」と言われて、学校で習ったことより、その言葉の方が印象に残ってしまったんです。

中学校時代は、同和地区の生徒と友だちとしてつきあっても、部落差別の話になると、私は知らないふりをしたり、逃げたりしていました。

その後、部落差別の厳しさを実感する出来事に何度か出会いましたが、「自分は差別していいから何もなくてもいい」と思っていました。

そんな気持ちを変えたのは十数年前、中学校時代の同級生で同和地区出身のBさんとの再会でした。私が参加した保護者研修会の講師がBさんだったんです。

「中学校の時、友だちが部落差別の話になると逃げていくのがつらかった。そういう人は自分でも気づかないうちに心の中

で差別をしていると思う…」その言葉を聞き、自分のことだと思いました。「私は差別をしていたんだ」と思い、愕然としました。

後日、勇気を出してBさんに出会いに行きました。Bさんからいろいろな話を聞き、知ろうとしないことも差別意識の表れだったと分かりました。それまで気づかなかった自分を情けなく思いました。

その気持ちをBさんに伝えると、「気づいてくれただけでうれしい。これからは一緒にがんばろう」と言ってくれたんです。Bさんの心の広さに胸が熱くなりました。

その出来事を小学校のクラス懇談で話すと、先生から「その話を子どもたちにも知らせてあげようか」と頼まれました。初めてのことで自信もなく、わが子の立場も心配でしたが、「お母さんが話したいならいいです」と背中を押され、引き受けることにしたのです。

当日は研究発表会でもあり、大勢の人が訪れました。「差別を受けたという話はよくある

が、差別をしていたという話は初めて聞いた」と、大きな反響があったようです。そこで、「なぜ、差別する側は何もしないんだろう」という疑問が浮かび、だんだんと怒りが湧いてきました。

差別を受けている人が状況を变えることは難しい。差別している人や、それを見過ごしている周りの人が変わらなければ差別はなくならない。そのことに気づける人を増やしていきたいという思いで、現在まで活動を続けてきました。

私は先生でもなければ、専門家でもありません。自分が経験したことしか話せません。でも、そうやって行動していくことで何かが変わっていくと信じています。私自身、まだ気づいていないこともたくさんあると思います。気づけるように、これからも学習を積み重ねていきたいと考えています。そうすれば、また新たな気づきが生まれて、行動へとつながるはずです。差別をする立場の人が変わらなければ差別はなくなりません。差別を受けている人以上に行動しなければ…!!

Aさんは「お母さん、また話しに行くだか？」と、よくお子さんに言われるそうです。Aさんはこう答えます「そんな話をしなくてもいい、差別のない時代になるまではね…」。

問い合わせ先

市役所本庁舎人権推進課

☎ (0857)20-3144